

# 受難節第2主日礼拝説教「追い出せるのか？」予稿

日本基督教団石神井教会 2026年3月1日

## 【旧約聖書日課】エレミヤ書 2章1～13節

- 1 主の言葉がわたしに臨んだ。  
2 行って、エルサレムの人々に呼びかけ  
耳を傾けさせよ。主はこう言われる。  
わたしは、あなたの若いときの真心  
花嫁のときの愛  
種蒔かれぬ地、荒れ野での従順を思い起こす。  
3 イスラエルは主にささげられたもの  
収穫の初穂であった。  
それを食べる者はみな罰せられ  
災いを被った、と主は言われる。  
4 ヤコブの家よ  
イスラエルの家のすべての部族よ  
主の言葉を聞け。  
5 主はこう言われる。  
お前たちの先祖は  
わたしにどんなおちどがあつたので  
遠く離れて行ったのか。  
彼らは空しいものの後を追ひ  
空しいものとなってしまった。  
6 彼らは尋ねもしなかつた。  
「主はどこにおられるのか  
わたしたちをエジプトの地から上らせ  
あの荒野、荒涼とした、穴だらけの地  
乾ききつた、暗黒の地  
だれひとりそこを通らず  
人の住まない地に導かれた方は」と。  
7 わたしは、お前たちを実り豊かな地に導き  
味の良い果物を食べさせた。  
ところが、お前たちはわたしの土地に入ると  
そこを汚し  
わたしが与えた土地を忌まわしいものに変えた。  
8 祭司たちも尋ねなかつた。  
「主はどこにおられるのか」と。  
律法を教える人たちはわたしを理解せず  
指導者たちはわたしに背き  
預言者たちはバアルによって預言し  
助けにならぬものの後を追つた。  
9 それゆえ、わたしはお前たちを  
あらためて告発し  
また、お前たちの子孫と争うと  
主は言われる。  
10 キティムの島々に渡って、尋ね  
ケダルに人を送って、よく調べさせ  
果たして、こんなことがあつたかどうか確かめよ。  
11 一体、どこの国が  
神々を取り替へたことがあろうか  
しかも、神でないもの。  
ところが、わが民はおのが栄光を  
助けにならぬものと取り替へた。

- 12 天よ、驚け、このことを  
大いに、震えおののけ、と主は言われる。
- 13 まことに、わが民は二つの悪を行った。  
生ける水の源であるわたしを捨てて  
無用の水溜めを掘った。  
水をためることのできない  
こわれた水溜めを。

### 【福音書日課】マルコによる福音書 3章20～27節

<sup>20</sup>イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。<sup>21</sup>身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。<sup>22</sup>エルサレムから下って来た律法学者たちも、「あの男はベルゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪霊の頭の手で悪霊を追い出している」と言っていた。<sup>23</sup>そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、たとえを用いて語られた。「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。<sup>24</sup>国が内輪で争えば、その国は成り立たない。<sup>25</sup>家が内輪で争えば、その家は成り立たない。<sup>26</sup>同じように、サタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。<sup>27</sup>また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。

### 主イエスの「家」で【こども説教のために】

主イエスは、「荒れ野」で四十日を過ごし、サタンからの誘惑を受けられると、「神の国」の福音を宣べ伝えるお働きを始められました。主イエスの行く先々には、多くの人が集まりました。主イエスは集まってきた人々の病気の人をいやし、悪霊を追い出されたので、ますます多くの人が集まってくるようになったのです。

その様子を見て、「あの男は気が変になっている」と言う者たちもいました。中でも、主イエスのことを子どものときから知っている人たちは、突然人々に「神の国」を教え始め、病気の人をいやしたり悪霊を追い出したりし始めた主イエスのことを見て、心配にもなったのでしょうか。そのことは、主イエスの家族の耳にも入るようになりました。特に心配したのは、母マリアだったかもしれません。身内の家族は、相談して、主イエスを取り押さえに行くことにしたのです。ナザレの家に連れ帰るつもりでした。

主イエスがいる家に行くと、そこには、中に入り切れないほどの人々が集まっていました。しかも、ただ事ではない様子です。エルサレムから律法学者が来ていて、集まっている人々に説いて聞かせているのです、「あの男はベルゼブルに取りつかれている」とか、「あの男は、悪霊の頭の手で悪霊を追い出している」などと。

主イエスは、ベルゼブルや悪霊の頭ではありません。誰かを追い出したいのでもありません。ただ、神の御心を行う人々の生きる「神の国」を成り立たせ、神の子らの生きる「神の家族の家」を成り立たせようとなさっていたのです。病気をいやすのも、悪霊を追い出すのも、その人々が主イエスの「家」にいられるようにしてくださるためのことだったのです。

## 悪霊を追い出している

わたしたちの教会で共に5年間、教会生活を重ねられたS神学生が、今週、神学校の卒業式を迎えられます。先週には、日本基督教団の補教師検定試験の受験も終えられています。いよいよ伝道者として送り出されるときが近づいてきました。伝道者は、教会から遣わされなければ、その働きを為すことはできません。主イエスの弟子たちが、主イエスのもとで学び、身に着けたことをもって、主イエスのもとから遣わされた先で宣教の働きを為したように、今日の伝道者も、主イエスの弟子たちに連なる教会共同体で学び、身に着けたことを、遣わされた先で為すのです。

今日の福音書日課の直前に、主イエスが弟子たちの十二人を任命し、使徒と名付けられたことが伝えられています(マルコ 3:13~19)。それは、「彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせるためであった」といいます。弟子たちの教会も、同じように、伝道者を立ててきました。伝道者が、いつも主イエスと共にいる者であるために、遣わされて宣教の働きを為す者であるために、悪霊を追い出す権能を持たせるために、彼らを特別に立ててきたのです。

もっとも、わたしたちの時代の教会は、「悪霊を追い出す」ということあまり熱心ではないかもしれません。それどころか、どこか胡散臭いこと、あるいは単なる迷信であるかのように扱っているのが実情かもしれません。カトリック教会の司祭が行う「悪魔祓い」をテーマにした映画「エクソシスト」は、50年以上前に公開され、テレビでも繰り返し放映されましたし、最近まで続編の制作が続けられており、人気のあるシリーズですが、多くの人々は、それを単なるオカルト映画として楽しんでいるだけでしょう。一部の教会で行われている「悪魔祓い」が、怪しげな魔術のようにもなっています。それでも、伝統的な教会では、今でも「悪霊退散の祈り」は大切にされています。殊に「受難節」の期節は、主日ごとの礼拝の中に特別な「悪霊退散の祈り」を加えるという習慣が受け継がれているのです。

主イエスが「悪霊を追い出す」ことを、どのように為さっていたのか、わたしたちは詳しいことを知りません。主イエスのことを見ていた周囲の人々でも「**悪霊の頭の方で悪霊を追い出している**」と考えざるを得なかったのですから、わたしたちに分からないのは当然です。それでも、主イエスが「悪霊を追い出す」ことを熱心になさり、弟子たちにもその権能を授けようとなさったことは、確かです。わたしたちの中には、追い出すべき「悪霊」が存在しているのです。「悪霊」に取りつかれているのです。主イエスは、そのことに無頓着ではいらっしやいませんでした。一人ひとりの者に、「あなたに取りつかれている悪霊を追い出そう」とおっしゃるのです。

## 「家」を成り立たせる

わたしが前任地の教会に仕えていたまだ三十歳代の頃、市内の諸教会の牧師・司祭の集まりが定期的であり、楽しくも学びの多い集まりでしたので、いつも参加していました。超教派の集まりでしたから、自分の所属する教派・教団の集会では話にくいことも話題になることがありました。あるとき、ルーテル派のベテラン牧師が、わたしを含めた若い牧師たちに諭すように、ご自分の教団で起こった一つの教訓をお話しくくださったことがありました。いわく、教会でどんなに腹が立つことがあっても信徒に向かって「サタン、退け」などと言ってはいけない、というのです。ある教会の牧師が、自分の仕える教会の役員会で重要な案件を議論しているとき、どうしても意見が対立する役員に向かって、思わず「サタン、退け」と言い放ってしまったというのです。結局その牧師は、その教会を辞め、他の教会に転任せざるを得なくなったそうです。

「サタン、退け」と言わなくても、牧師が意見の対立する信徒に向かって「悪霊よ、出ていけ」と告げたら、おそらく辞任ものでしょう。もちろん、「悪霊退散の祈り」という体であっても、それが、だれかを排除したり、黙らせたりするためのものであったならば、同じことです。牧師でなくても、信徒であっても、同じことです。

それでも、教会は、「悪霊退散の祈り」を続けてきました。それは、教会が対立を煽るのでなく、だれかを排除するのでなく、だれかを黙らせるためでもなく、一つであり続けるためです。

「悪霊を追い出す」働きを非難された主イエスは、言われました、「**国が内輪で争えば、その国は成り立たない。家が内輪で争えば、その家は成り立たない**」と。主イエスは、内輪で争う現実を、嫌というほどご覧になられてきたのでしょう。対立を煽り、だれかを排除したり、だれかを黙らせようとする行動を、人は、気づかぬうちにしてしまうのです。何かに熱心になればなるほど、大切に思うことであればあるほど、そのような過ちを、わたしたちは、そうするつもりが無くても、むしろ逆のことを考えていても、いつのまにか犯してしまうのです。それは、わたしたち自身の内面に、相争う自己というものがあるからなのでしょう。「悪霊」が働く隙が、わたしたちの内面にこそあるからなのでしょう。

主イエスは、「まず強い人を縛り上げる」とおっしゃいます。わたしたちの中の「強い者」を、主イエスは取り押さえようとしてくださっているのです。そこから「悪霊」の働く隙が生まれるからです。代わりに主イエスは、わたしたちを「真に強いお方」の前に立たせてくださるでしょう。ただわたしたちは、「悪霊退散」を祈ってくださる主イエスのもとに留まるのです。